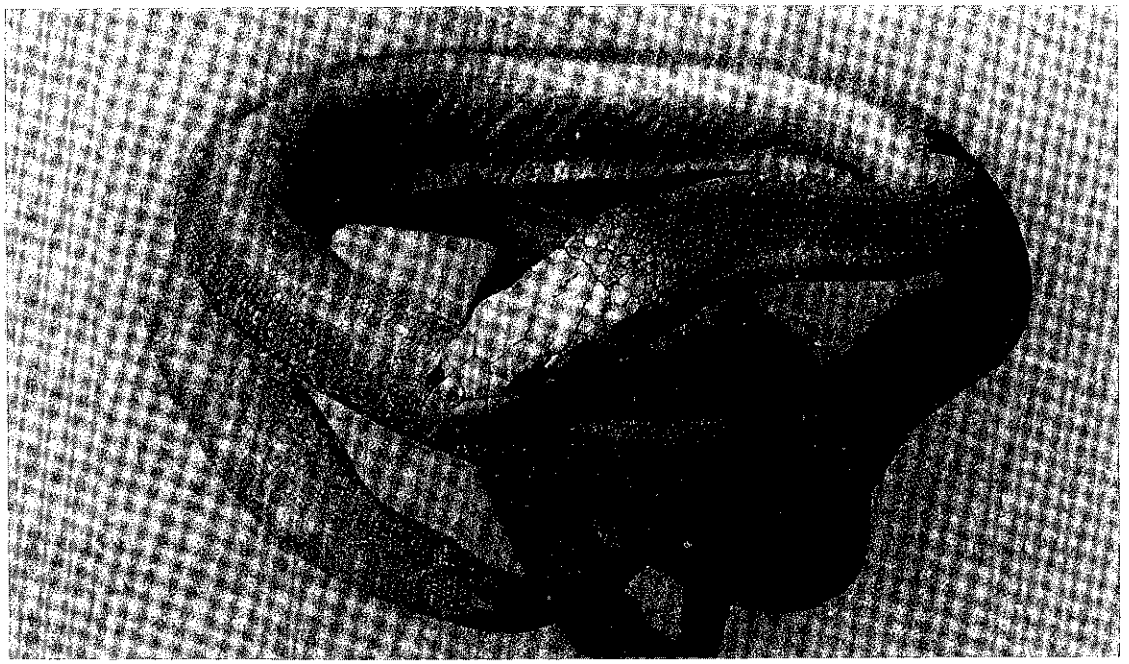
ISSN 1341-6928

串本海中公園 マリンパビリオン

1999. 8. Vol. 28, No. 8



セグロウミヘビ

Pelamis platurus (Linnaeus)

太平洋とインド洋の外洋に棲息する猛毒種のウミヘビで、成長したものは全長90cmに達する。本種の分布域については大西洋側への進出が知られており、パナマ運河を経た分布の拡大とも考えられている。本種は頭部が細長く胴体が側扁しており、体色も背と腹部とが黒色と黄色味を帯びたオレンジ色とに分かれ、尾部には半円黒斑の連なりがあるなど、沿岸域に住む他種と形態や体色が大きく異なる。小魚を餌としており、海面で静止して自身の陰に集まった多種多様な魚類を捕食すると言われる。一度に全長22～26cmの幼体を２～６匹生む胎生種であるが、繁殖期は分布域で異なるとされている。

写真の標本は1994年10月に和歌山県串本町大島沖の曳縄漁で生け捕りにされ、翌年の２月まで当館で飼育された全長63.5cmの個体。コブラ科。 I. M.

串本海中公園センター

POLYCHAETOLOGICA (7)

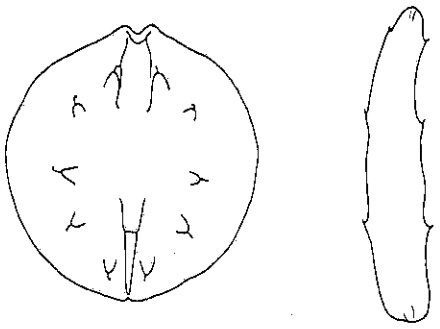
多毛類の科の検索　5

内田紘臣

前回（Vol.28,p.40）に続き、多毛類の科の検索表を挙げる。

47(46).虫体は円盤状もしくは多少とも前後に長く、疣足は虫体腹面に多少とも放射状に配列する.　48

47.虫体は蠕虫状に長く、疣足は左右に並ぶ.　50

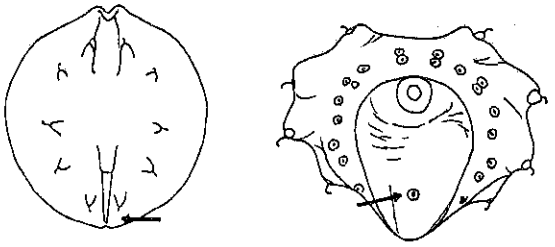


（腹　面）

48(47).肛門は虫体末端に開口する. 咽頭は翻出可能. ウミユリ類上に虫コブを作り、その中にすむ.

Fam. Cystimyzostomidae

48.肛門は体後部背面に開口する.　49



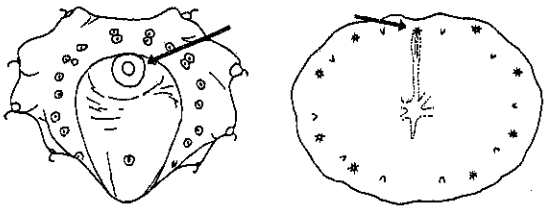
（腹面）　（背面）

49(48).咽頭は翻出可能. 表皮細胞はクチクラ層を欠き、繊毛がまばらに生える. ウミユリ類の胃中に内部寄生する.

Fam. Pulvinomyzostomidae

49.咽頭は翻出不能. 表皮細胞はクチクラ層で覆われ、繊毛を欠く. ヒトデ類に内部寄生する.

Fam. Asteriomyzostomidae

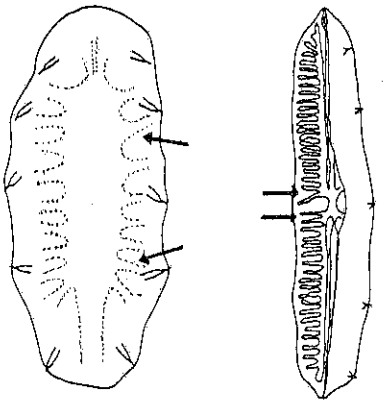


（背面）　（腹面）

50(47).腸管は全長にわたって盲管を分岐する. 5対の微小な吸盤をもつ. テズルモヅル類に内部寄生する.

Fam. Protomyzostomidae

50.腸管は盲管を欠くか、腸管の一部からのみ盲管を分岐する. 吸盤を欠く.　51

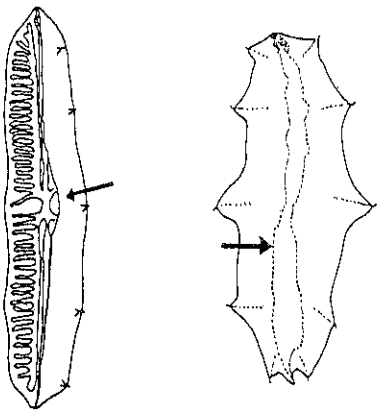


（腹面：右図は左側の表皮をはぎ、内部を示す）

51(50).腸管は体中部第3疣足付近の部位から2–3対の盲管を派出する. ウミユリ類の生殖巣に内部寄生する.

Fam. Mesomyzostomidae

51.腸管は盲管を欠く. ウミユリ類に内部寄生する.　Fam. Stelechopidae

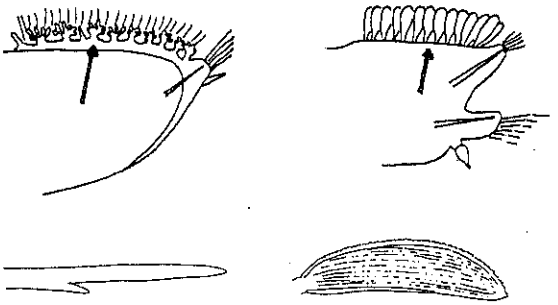


52(3).背剛毛の横列にそって鰓がならぶ.背面にならぶ背剛毛は扁毛ではない

ケハダウミケムシ科 Euphrosynidae

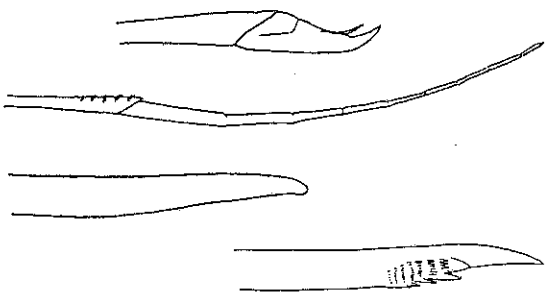
52.背剛毛の横列にそって鰓がならばない. 背面にならぶ背剛毛は蝶類の鱗粉の様な形をした扁平な扁毛.

タンザクゴカイ科 Chrysopetalidae



53(2).体中部～後部の腹疣足に複剛毛をもつ. (上2図) 54

53.体中部～後部の腹疣足の剛毛は全て単剛毛. (下2図) 55

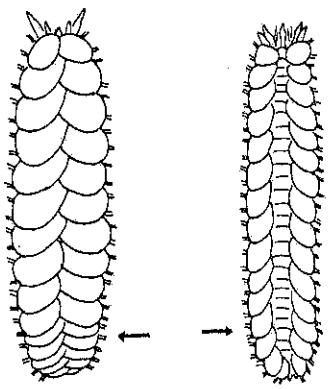


54(53).体後部では全体節に背鱗がある.

ノラリウロコムシ科 Sigalionidae

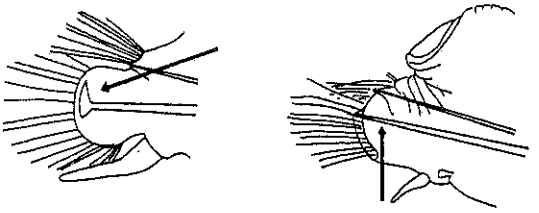
54.体全域にわたり背鱗はとびとびに分布する.

Fam. Pholoididae



55(53).腹疣足の足刺の先端はハンマー状に広がる. Fam. Eulepethidae

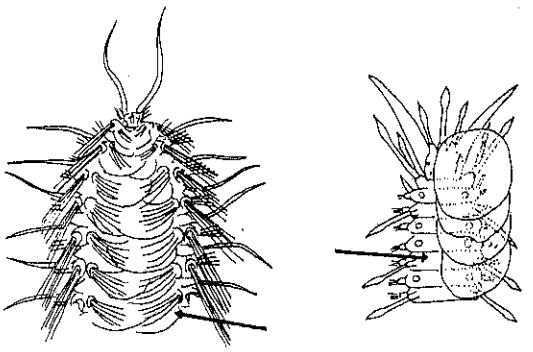
55.腹疣足の足刺の先端は広がらない. 56



56(55).背剛毛の一部は背面方向に弯曲し、背面の一部を覆う. そのような背剛毛のうち、細いものと泥とでフェルト状の膜を作り、背鱗がその下に隠れることもある (2, 右図参照). 口吻に顎を欠く.

コガネウロコムシ科 Aphroditidae

56.背剛毛は体側方に派出し、背面を覆うことはない. 口吻に4個のキチン質の顎をもつ. 57

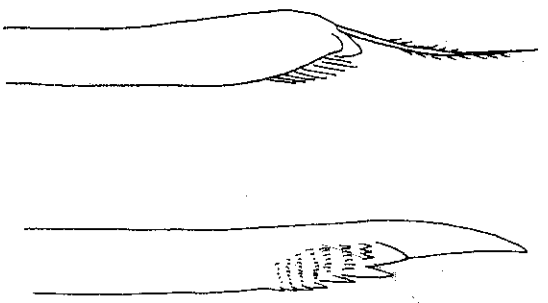


57(56).穂型の剛毛をもつ. 背疣足に紡績腺をもち、細い糸を紡ぎ、これで棲管をつくる.

ホガタウロコムシ科 Polyodontidae

57.穂型の剛毛を欠く. 紡績腺を欠く.

ウロコムシ科 Polynoidae



第26回　マリンスクール　開催

夏の恒例行事、マリンスクールも今年で26回を迎え、8月2日から8月4日の2泊3日の日程で行われた。参加者は4校18名で、遠くは和歌山市からの参加者もあった。今年は残念ながら天候に恵まれず、次々とやってくる熱帯性低気圧や台風により、開校中も晴れと雨が交互にやってきて、急な雨で海岸での飯盒炊さん中に室内に逃げ込んだり、キャンプファイヤーが室内でのゲーム大会に変更されたりした。波も高い状態が続き、グラスボートに乗れなかったが、「磯の観察」では潮の高い午前中は近くの有田港に場所を移すなどして、観察も無事に行うことができた。

雨と波によって散々なマリンスクールとなったが、参加した生徒たちはそれぞれに楽しい日々を過ごすことができたようだ。以下に参加した生徒の書いた感想文を紹介する。

「マリンスクール」

串本中学校2年　西　大輔

僕は、今回マリンスクールに来させてもらって、とてもいい思い出がたくさんできました。みんなでご飯をつくったり、テントでねたり、魚を観察したりして、すごくおもしろかったです。

とくにおもしろかったのが、錆浦海岸で魚を観察したことです。色とりどりのきれいな魚を、水中で観察するのは、とてもきもちよかったです。見たことがなかった魚がたくさんいました。どの魚もきもちよさそうにおよいでいました。

ご飯をつくるのもたのしかったです。カレーや肉じゃがをみんなでつくって食べました。外でたき火をしてつくりました。みんなでがんばってつくったご飯は、とてもおいしかったです。でも、食器をあらうのがたいへんだったです。

ファイヤーストームができなかったのはちょっとざんねんだったけど、ゲームをして遊んだのがよかったです。

テントでねるのも、なかなかない体験でした。なかなかねれなかったです。ねている途中で雨がふってきたのは困りました。

水族館の見学は、魚やウニや、たくさんの生き物を見れてよかったです。エサをあげさせてくれました。魚のエサにもいろんな種類がありました。魚にあわせてエサをあげたりすることは知りませんでした。とてもいい勉強になりました。

水中展望塔の見学では、魚の絵をかきました。オヤビッチャという魚がキレイでした。オヤビッチャの絵は、シャーペンでかいた白黒の絵だけど、けっこううまくかけたと思います。夜も見学に行ったけど、ぼくにはオヤビッチャがみつけられませんでした。ざんねんだったです。

最後のカメの放流では、とても感動しました。カメをだくのは、初めてのことでした。手をペシペシ動かしていました。とてもかわいかったです。「ウミガメを知る」というクイズは、むずかしかったけど、ウミガメのことが少しわかりました。ウミガメの仲間は世界に8種類とは知らなかったです。100種類くらいいるのかと思っていました。カメを放流するとき、カメはまだ知らない海に元気よくおよいでいきました。もしかしたら3年後くらいに外国で発見されるかもしれないと言っていました。すごいたびだなぁと思いました。

毎日がおもしろいことばかりで、とてもいいマリンスクールだったと思います。また、きてみたいと思いました。



放流したウミガメを見送る

1999年度　夏期実習生思考

日本海洋科学専門学校
水産増殖学科　2回生　　辻 暢夫

僕は水族館の仕事というのがどういうものかを知りたくて、実習を希望しました。話を聞くよりも、実際に来てみるのが最も良い方法だと思ったからです。できる限り多くの仕事をしようと思って、1ヶ月の実習に臨みました。ここでは餌つくり、餌やり、水槽のガラス拭き、水槽掃除など魚の飼育に加えて、展示水槽の水温測温、マリンスクールの準備、駐車場整理と、することがたくさんあります。僕の想像していたよりずっとたくさんの仕事があり、驚きました。でも水族館の裏側を体験する事ができ、うれしく思っています。仕事の他にもよかったことがあります。それは、実習の初日から串本の海を泳いで海中の生物を見ることができたことです。海底にはサンゴ礁落が広がり、そこを住み家とする何十種という魚が泳いでいました。もう一度泳ぐ機会があれば、その時までに魚だけでなく、サンゴやその他の生物の名を覚えてから、泳ぎたいと思います。

串本海中公園での実習のおかげで、今までの学生生活の中で一番充実した夏休みを過ごせました。本当にありがとうございました。

下関水産大学校
生物生産学科　2回生　　木村 純治

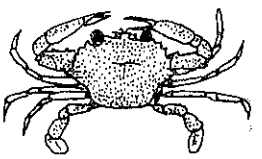
なぜ水族館が好きなのか、考えたことはないけれど、昔から魚を飼っていて、魚に愛と恋心を持ちながら接してきた。魚に「その餌はおいしいか？」、「水は快適か？」などと尋ねてみると、ずいぶんいろんな意見を聞かせてくれるもので、「古いもん食わせんな」とか、「ふえ～、息苦しい」等と良く言われた。ということで、餌と水質についてはここに実習に来る前から興味があった。来てみると与えている餌の種類は少なく（10種類程度）、意外だった。しかし！そこからがすごかった。餌の大きさから量まで、各飼育担当員によって多岐にわたる細かい工夫、こだわりがあり、このことは串本に実習に来て一番勉強になったことだった。

水質管理については、大型循環式濾過がない点が残念だったが、飼育水を海から無濾過で給水することのメリット、そして中型の循環式濾過に関しては充実しており、参考になった。他にも勉強させてもらったことはたくさんあるが、全ては書けないので、ここで勉強させてもらった多くの事と共に、私自身の努力と、水族館で役に立てる人になることで表現し、串本海中公園へのお礼としたいです。

東海大学
海洋学部　1回生　　萩原 隼人

社会に出ても何の役にも立たない日本の御用教育に飽き飽きしていたところに、いきなりこんな機会に巡り会えたことは幸せでした。ここはダイビングの雑誌、他のガイドブックでもべた褒めのところなので、興味があったのですが、来てみてやはりと思いました。水族館は明らかに古く、一昔前の建物ですが、飼育しているサンゴの美しいこと美しいこと。開館当初から約30年も生き続けるサンゴ。目の前の海で卵を採りそこから大きくしたサンゴ。更に水槽内でのサンゴの産卵まであるのです。サンゴの飼育繁殖技術なら他の有名な水族館に勝っています。わざわざ高い交通費を払って長時間電車に揺られながら来た甲斐がありました。また今回はサンゴの卵採取後の孵化、幼生の着床などめったに見られないものを見ることができたので、今後の参考にしたいと思います。

最後に実習生の潜水訓練のために、わざわざプライベートな時間を割いて下さったスタッフの皆さんに感謝します。

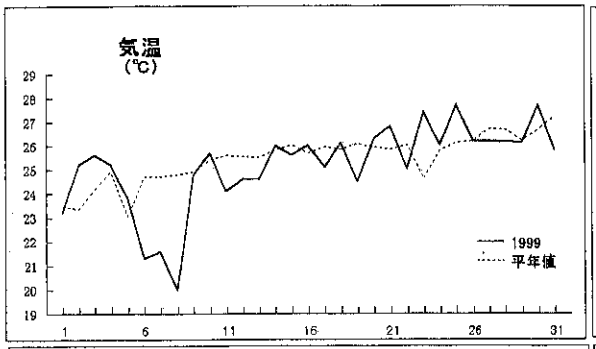


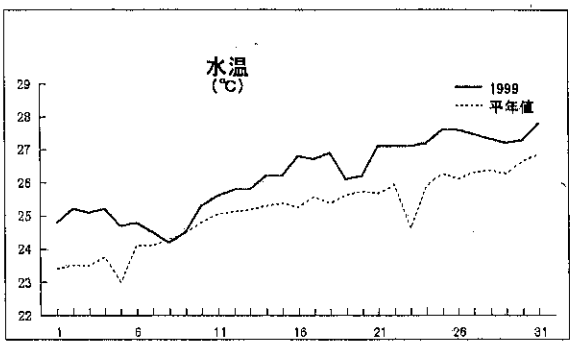
錆浦の海から

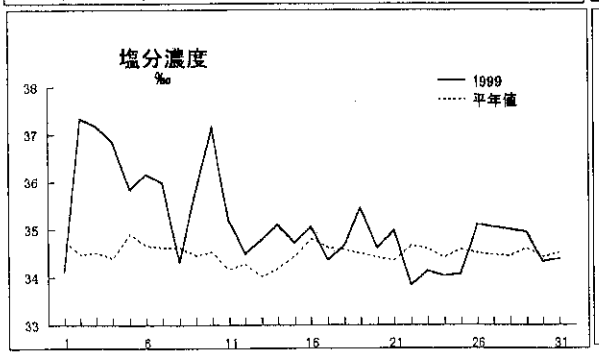
宇井晋介

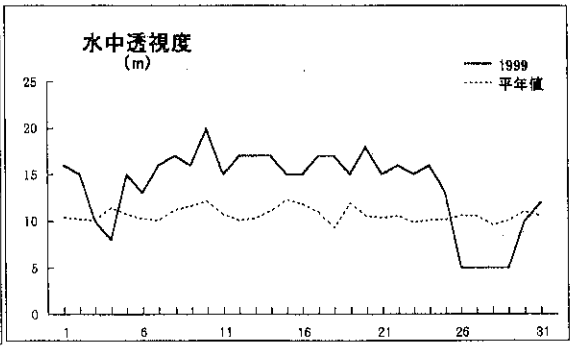
7月 平均値	気温　25.1 ℃	水温 26.1 ℃	塩分　35.10 ‰
	透視度 14.3 m	月間降水量　107.8 mm	

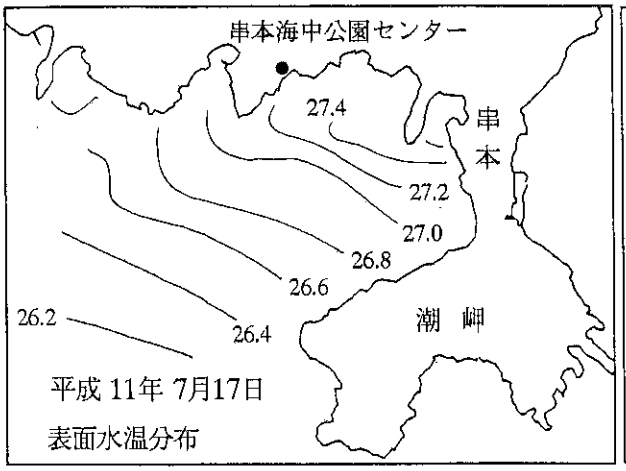
エルニーニョが収束したら今度はラニーニャだとか。ラニーニャはスペイン語で女の子の意味らしいが、その影響かどうか、今年の夏はまるで先が読めない変わりやすい天気続きであった。南の海上を熱帯低気圧が次々に北上してくるため大気が不安定で、晴れていたと思えば、一転にわかにかき曇り滝のような雨という本当に忙しい天気ばかり。波も高く当センターの売り物グラスボートも港内で魚たちの憩いの場と化した。各地で水の事故が多発したが、今年は増水した川に流されるという河川での事故が多かった。アウトドアブームで、最近は野外でキャンプをする人たちが急増したのに加え、折りからの不況で、暇があってもお金がないという人も増え、河原や海岸にテントを張って安上がりに過ごすという人も多いそうだ。南紀一円の観光施設も不況に加えてこの天候不順で、弱り目にたたり目と言うところである。高く晴れ上がった秋空を、一日も早く望みたい。











マリンパビリオン Vol. 28, No. 8 通巻 332号
1部 50円（年間購読料 1,500円 送料含む）
印刷日　平成 11 年 8 月 20 日
発行日　平成 11 年 8 月 25 日
口座番号：00990-9-41351
口座名称：串本海中公園マリンパビリオン
編集兼発行人
〒649-3514 和歌山県西牟婁郡串本町有田1157
（株）串本海中公園センター
電話　0735（62）4875
FAX　0735（62）7170
印刷所
坂本印刷
串本町串本2481　Tel: 0735（62）0895